

翻 訳

張愛玲著

「桂花蒸す——阿小秋を悲しむ」

蟹 江 静 夫 (訳)

[解題]

張愛玲 (1920.9.30–1995.9.8) は、1940年代日本占領下 (淪陥期) 上海で文壇デビューした女性作家である。代表作「傾城之恋」(1943)、「金鎖記」(1943)、「紅玫瑰与白玫瑰」(1944)などを収録した小説集『伝奇』(1944, 増訂本1946)、自伝的エッセイ「私語」(1943)や「燼余録」(1943)などを収めたエッセイ集『流言』(1945)は、いずれもこの時期における活動の集大成である。

日本敗戦後、国共内戦、中華人民共和国建国を経て、1952年、香港に移住。さらに1955年にはアメリカに渡り、映画の脚本、自伝体小説の執筆や旧作の書きなおし、そして『紅樓夢』研究などに従事した。

近年では2007年に公開された映画『ラスト・コーション』(李安〈アン・リー〉監督)の原作が張愛玲の短編小説「色、戒」(1978)であったり、張愛玲の友人であった宋淇・鄭文美夫妻の息子であり、張の遺産相続人でもある宋以朗氏が2009年以降に彼女の未発表作品を次々と刊行したりするなど、張愛玲に対する関心がよりいっそう高まっている。

ここに訳す「桂花蒸す——阿小秋を悲しむ (桂花蒸——阿小悲秋)」は、はじめ雑誌『苦竹』第二期 (1944.12) に掲載、のちに『伝奇・増訂本』(山河図書公司, 1946.11) に収録された。淪陥期上海在住の外国人男性に仕える女中さん阿小の、たくましく生きる日常の中にほのかにうかがえる悲哀のようなものが印象に残る短編小説である。

訳出に際して、底本は『紅玫瑰与白玫瑰』(張愛玲全集, 止庵主編, 北京十月文芸出版社, 2012.6) を使用した。また、Simon Patton 氏の英訳 (『Lust, Caution』Julia Lovell 編, Penguin Classics, 2007) を参照させていただいた。

[翻訳]

「秋は一曲の歌である。しかし「桂花蒸す」夜は、厨房で吹く簫の調べ、昼間に子どもが歌う歌のようで、熱く、熟し、澄んでいて、湿っている。」——ファティマ

丁阿小が息子の百順の手を引っ張って、一階また一階と建物を上がってくる。高い建物の後ろのベランダから遠くを眺めると、都市が広野となり、果てしなく広がる無数の赤や灰色の屋根は、みな裏庭、裏窓、裏町で、空さえも顔を背けてしまっていて、無表情の曇った一面は、8月を過ぎてもまだこんなに暑いが、どんなつもりなのだろう？ 下からたくさんの音が浮かび上がってくる。色々な車、パンと絨毯を叩く音、学校のチリンとベルを鳴らす音、職人が何かを打ったりのこぎりで引いたりする音、モーターがブーンと鳴る音、しかしどれもたいへんぼんやりしており、まるで神様の御心に留まらず、どこ吹く風のようなのだ。

アパートの向かいの女中さんが子どもたちと裏のベランダでお粥をすすっている。暑すぎる陽気で、お粥も熱すぎて、唇をすぼめてフーフーと吹きながら、眉間にきつく皺を寄せる。自分の唇が大事なのかそれともその真っ白なお粥が大事なのか。向かいの女中さんは結婚して装いを気にしなくなった女で、纏足を途中でやめた足で、髪は切っている。彼女は子どもたちの面倒を見て朝食をとらせ学校へ行かせるのに忙しくしている。彼女の耳には細い一束の短い髪がかかり、湿っていて顔に墨がついて乾いていないかのようなのだ。彼女は阿小にあいさつした。「おはよう、妹さん！」子どもたちが次から次へと叫んだ。「おばちゃん、おはようございます！」阿小が返事をした。「姉さん！」百順も叫んだ。「おばちゃん！ お兄ちゃん！」

阿小が言った。「今日は来るのが遅くなってしまったわ——あの忌々しい電車がすごく混んでいて、駅を過ぎてからやっと降りれたの。外国人が間違いなくベルを押したのよ！」お向かいの女中さんが言った。「このところ全くおかしいよ、こんなに暑いなんて！」阿小も言った。「本当におかしいわ！ もうすぐ9月なのに！」さっきの三等車の中で、彼女は混み合っただけで立っておられず、顔が背の高い人の紺色の長衣にひっついて、その生地奥からブンブンとその中の熱気が漂ってきた。この天気のおいもその上着のようだ——しかも決して自分の服ではない。自分の服なら汚くてもまだましだ。

阿小はあわててドアを開けて入っていき、呼び鈴の前をさっと見ると、案の定、二号の札が落ちていた。主人は昨日家で夕食をとらず、阿小を2時間も早く帰らせた。だから彼は今日は特に面倒だから、阿小に埋め合わせをさせるのだと予想した。阿小は水がめのふたを開け、鉄のひしゃくで水を汲み、やかん一杯に入れ、ガスコンロの上に置いて沸かし始めた。戦時中は水道水に制限があり、どの家にもこのようなかめがあった。濃褐色の大きな水がめの表面には淡い黄色の龍が模写されている。女がその中に自分の姿を見ると、いつもいにしえの美人のようだ。しかし阿小は都会の女性だから、むしろドアの縁の緑の漆喰塗りの壁に貼りつけてある角の欠けた化粧鏡（元はかぼんの付属品である）に映し出すのを好む。髪を見てみると、まだあまりごわついている。阿小はお下げを結って、後頭部の髪をひとまとまりずつ恨めしそうに、全く見えなくなるまでよじらせ、それでようやくさっぱりとした見

た目になる。額の前は流行りのスタイルに合わせて高く盛っている。かたくしておけば、3、4日に一度とかせばよい。阿小はドアの後ろから白いエプロンを取って締め、腰掛けを持っていき、その上に乗って、棚からコーヒーを出した。阿小は小柄である。

「百順！——またどこへ行ってしまったんだい？ こんなわずかな時間でも遊ぶことしか考えていないんだから！ 早く食って学校へ行きな！」阿小は大声で叱った。彼女の美しい痩せ顔はきつくなるとまるで継母のようだ。百順は顔がまん丸で、眉も目も細く、従順な態度で、板の腰掛けを外に運んだら、またビスケットの容器を抱えて出てきて、容器の上に座り、腰掛けに皿やコップを置いて、静かに待っている。阿小は冷蔵庫の上の素焼きの瓶から食べ残しの半分の大きなパンを取り出して、言った。「ほら！ 持っていきな！ できるもんなら一人で全部食べてみな！——少し残して人にやることも考えなきゃだめだよ。見たことがないよ、これっぽっちの男の子が、大人よりもたくさん食べるなんて！」

窓台には青色のグラスがある。彼女は中に挿してある歯ブラシを取り出し、魔法瓶から水を注ぎ、百順に渡して、また叱った。「何もかもお仕えする人がいなきゃいけないのかい。おまえは1ヶ月にいくらお金をくれるんだい、あたしがおまえにお仕えして？ 前世ではおまえにどんな借りがあるの！ 食べたら早く行きな！」

百順はまだパンをかじっていたが、すぐにかぼんを取りに行った。ふと、彼は夏の間ずっと着ている色あせた青色の作業着がたいへんくたびれていると感じたので、言った。「お母さん、明日はセーターを着てもいい？」阿小が言った。「おかしくなっちゃったのかい！ この暑い日にセーターだなんて！」

百順が出かけると、阿小はため息をついた。子どもの学校には本当に世話がかかると思っている。授業料が大幅に値上げされ、その他にあれこれとたくさん支出がある。ただ手作業をするだけなのに、赤や緑や金色の紙を買うのが恐ろしい。窓台には醤油瓶の下に彼が作った小さな国旗が一つ置いてあり、細い竹ひごに青天白日満地紅がついている。阿小は頭を傾けちらりと見ると、みじめで不愉快な気持ちしかなかった。

ようやくコーヒーが沸き、大きな銀の皿をきちんと並べると、電話のベルが鳴り出した。阿小は受話器を持ち上げ、これみよがしに英語で鋭く言った。「ハロー？ ……さようです、ミス、ちょっとお待ち下さい。」阿小はこれまでにこの女の声聞いたことがない。また新しい女だ。彼女はドアをノックした。「ご主人様、お電話でございます。」

主人はすでに身支度をすませ、服を着ていたが、その様子は阿小をひどく不機嫌にさせた。主人の顔の肉はよく焼けていないようで、赤い血管が浮き出ている。2本の口髭を新たに蓄え、頬はとりわけ滋養によい途中まで孵化した鶏の卵にすでに黄色い羽根が生えているかのようだ。しかしゴード氏はやはり美男だと言える。非常にずる賢そうなグレーの目で、しかも姿は優雅なのだ。ゴードは歩いて出てきて電話に出た。「ハロー。」それから、突然声

がひどく弱々しくなって、「ハロー！」びっくりしたり喜んだり、魂を奪われたかのように、「君かい？ まさか本当に君なのか？」と言っているのに等しかった。彼は朝早く起きても驚いたり情のために狂ったりすることができるのだ。

しかし阿小は、人を惑わすこの「ハロー！」を何度も聞いているので、構わず厨房へ歩いていった。昨日は「金髪女」が招待したのだが、きっと一緒に戻ってきたのに違いない。なぜなら厨房には使用済みのグラスが2つあるだけで、その1つには口紅がついていたからだ。女はいつ帰ったのだろうか？ ゴーダのその女はこれまでここで夜を明かしたことがなかった。女が帰ってからゴーダは厨房へ行き生卵を食べた。阿小はブリキのごみ箱にそっくりそのまま卵の殻があるのに気がついた。ゴーダは上に1つ穴を空けるだけで、さっと吸う。まるで野蛮人である。冷蔵庫には現在電気がついていないので、ドアを閉めるべきではないのだが、ゴーダは卵を取ったついでに閉めてしまった。阿小が開けると、中からひとしきり甘い嫌なおいがして、チーズ、フォアグラソーセージ、卵を取り出した。ゴーダは朝食を家ですませるが、あとの二度の食事は人に誘われることが多い。冷蔵庫にはあと「ホルモン」チャーハンがあるが、ゴーダが食べ残したもので、すでに一週間も経っている。阿小は彼が忘れたわけではないことを知っている。なぜならゴーダはしょっちゅう冷蔵庫を開けて状況を探っているからだ。彼が一言「もう要らないから、君が食べてしまいなさい」と言わないかぎり、阿小は彼に「まだ要りますか」とは決して尋ねない。阿小にはゴーダの性格が分かっているのだ。

主人が電話を切ると、メモ帳に女中さんの書き残したものをチェックした。ゴーダが留守のときに誰かが電話をかけてきて、書き記した電話番号である。その通りに電話をしてもつながらぬ。彼は厨房に顔を出して、ゆったりとした調子で声をかけた。「女中さん、みっともないなあ！ いつも数字がはっきりと書けないんだから！」指を一本立てて警告するように揺らしている。阿小は両手をエプロンの中に入れ、顔には赤くなった笑みを浮かべていた。

ゴーダが阿小の子の食べ残したパンをちらっと見たので、阿小は彼が疑いをかけたのだと思った。じつはこれは阿小が隣の女主人から余ったパンの配給券をもらって買ってきたものである。主人がまだ何も言わないうちに、阿小はとっさに顔を赤らめた。蘇州の女中さんは最も勝ち気で、他人のちょっとした表情にも耐えられず、ましてや非難の言葉などは言うまでもなかった。とくに阿小は生まれながらこういった容貌であり、顔が赤くなれば張り手を食らったように、薄い頬に一本一本の赤い指の跡が腫れて浮かんでくる。阿小の全体的な顔の形はまるで陵辱されたようで、眼は切り開いた二本の線のよう、眼の中には深遠な世界が現われ、その中には美女がいた。

主人は心の中で思った。「このような者をまた得ようと思っても、見つけるのは難しい。

阿小を使っておくには、どうしてもしっかりとご機嫌取りをしなくては。」ゆえに問い質さずに、ただ「女中さん、今晚二人分の食事を用意しておいてくれ。牛肉を1ポンド買うんだよ。」と言うだけだった。阿小が言った。「先にスープで煮込み、それから揚げるんですか。」主人はうなずいた。阿小が言った。「あとは何がいりますか。」主人はつぶやきながら、片手を戸のかまちにおき、片手を腰に当てていた。彼のグレーの目は、色目を使わないときは白目をむいていて、大きく見開き、あの食べ残したパンを見ていたため、阿小を不安にさせた。彼が言った。「とうもろこし、かな。」阿小はうなずき、言った。「とうもろこしですね。」毎度同じ料理だが、幸いなことに招待するのは別の女だ、と阿小は思った。ゴードが言った。「あと甘いものを1つ、クレープを2枚作ってくればいい。」阿小が言った。「小麦粉がございません。」ゴードが言った。「なら卵を使うんだ、小麦粉を使わなくてもいい。」甘い卵なんて阿小はこれまで見たことがなかったが、それでも慣れた口調で答えた。「かしこまりました。ご主人様。」

阿小は朝食を部屋に届けると、棚の金髪女の写真が片づけられているのに気がついた。今日招待するのはきっとあの新しい女だ。普段は李お嬢さんたちが来ても写真をどかすのを嫌がっていたくせに。李お嬢さんは最も思いやりがあり、来るたびに阿小に100元渡していた。阿小は李お嬢さんが大家の妾だと予想していたが、そうとも限らない。たいそう自由のようで、それにあまり美しくなかった——もちろん妾は必ずしもみな美しいわけではないのだが。

阿小はまた電話に出た。「ハロー？ ……はい、ミス、少々お待ち下さい。」阿小はノックをして入って、言った。「ご主人様、お電話です。」主人は誰かと尋ねた。阿小が言った。「李お嬢様です。」主人は出たがらず、阿小が代わりに返事をした。「ゴード氏ですが彼女は浴室にいらっしゃいます！」阿小はただ「ハロー」がきれいなだけで、その先は目茶苦茶、しかも男性と女性の「彼／彼女」がはっきり区別できなかった。「申し訳ございません、ミス、ひょっとして少ししたらまたかけて来られますか。」相手が言った。「ありがとう」。阿小が答えた。「とんでもございません。失礼致します、ミス。」

ゴード氏は朝食をすませて会社に行った。行くときはいつものように優しく呼びかけた。「じゃあね、女中さん。」女中さんも急いで出てきて笑みを浮かべて答えた。「いってらっしゃいませ、ご主人様！」阿小は部屋を整理し、浴室に行ってみると、思わず歯をぎりぎり言わせてフンと言った。ゴード氏はシャツ、枕カバー、シャツ、ズボン、大小のタオルをみなバスタブに入れてしまう。そうしなければ安心できない。阿小がその日のうちに洗ってくれないのではないかと心配なのだ。今日は太陽が出ておらず、洗ってもどうやって乾かせというのだ。阿小はその上買い物に出かけなくてはならないし、アパートは毎日1時間しか水道が出ず、バスタブが占拠されてしまったら、放水時間に間に合わない。しかも彼は毎

日風呂に入るのだ。

李お嬢さんがまた電話をかけてきた。阿小が言った。「ゴード氏ですが彼女はオフィスに行かれました！」李お嬢さんは中国語で彼のオフィスの電話番号を尋ねると、阿小も中国語で言った。「李お嬢さんですね。」笑いながら、顔中真っ赤っかで、全てのまじめな女を代表してこの女のために恥ずかしい思いをしている。「わたくしはオフィスの電話番号を存じ上げておりません。……昨日はお出かけになりませんでした。……はい、家で夕食をおとりになりました……お一人で食べられました。今日は分かりません、何もおっしゃっていませんでしたから……」

金髪女が電話をかけてきて、昨日の接待のときにゴードから借りた食器を人を遣わして返しに行かせたいとのこと。阿小が言った。「ゴード氏ですが彼女はオフィスに行かれました？ ……はい、ミス。わたくしは女中でございます。……わたくしは元気です、ありがとうございます、ミス。」「金髪女」の声はヌガーのように甘く、あちこちでコネを作ろうとするので、阿小は口先だけ親切そうにし、はにかんだ笑顔を見せ、まるで自分よりも地位の高い人とは友だちになれないかのようであった。阿小がまた尋ねた。「いつ女中さんをお遣いにやるのでしょうか。これからわたくしは市場に行きますので、9時半に戻って参りましたぶん。……ありがとうございます、ミス。……とんでもございません、失礼致します、ミス。」彼女は金切り声をあげ、ひとしきりやかましく話した。外国語の世界は永遠に明るく、余裕があって、うわべだけのものなのだ。

阿小は食材を買って帰ってきた。「金髪女」の女中さんである秀琴も同郷の妹分で、阿小がゴードに頼んで雇ってもらったのだ。後ろでドアをノックして、呼んでいる。「姉さん！姉さん！」秀琴は21、2歳で、大柄な体格、長い巻き髪をしていて、それでも暑さには平気で、青のシャツの上に着ぎの毛で作られた青緑色の上着も羽織っている。大学生のように着こなすことができるのは、明らかにまれに見る幸運である。秀琴のような薄紅色のぼつちり顔でも、小さな目が充血してぱっちり開けられない（トラコームのせいであろうか）。秀琴自身もあでやかさがあると感じているらしく、モンゴルのご婦人が顔を覆っているずっしりとして様々な色をした瓔珞ようらくのすき間から外をうかがっているかのようなのである。

阿小は新聞紙にくるんだ食器を秀琴から受け取ると、笑みを浮かべて尋ねた。「昨日は何時に終わったんだい？」秀琴が言った。「2、3時まで騒いでいたわよ。」阿小が言った。「女主人さんがそれからうちに来てまた帰っていったのは、どう見ても日が明けてからよね。」秀琴が言った。「そう、あれからまたここに来たの？」阿小が言った。「来たようね。」二人がこのことを話しているとき、顔には天真爛漫な笑みを浮かべ、他人のことを言っているようではなかった。二人の男主人は風で、あちこち走り回り、埃をたくさんまき散らし、女主人の方はマホガニーの浮き彫りで、もっぱら埃を集めてばかり、女中さんたちは朝から晩ま

で拭いてもきれいにならない。しかし、二人が文句を言っているのはこのことではなかった。

秀琴は両手を胸の前に合わせ、阿小が食器を戻しているのを見ながら、ぶつぶつ言った。「うちの女主人とここのご主人は生まれつきの夫婦なのね。お金の使い方が上手で、必要なものにさえも出し惜しみをするんだから。あの日の招待も、椅子がいくつか足りなかったけど、やはりお向かいさんに借りに行ったの。パンが足りなくなると、今度はご飯を借りに行ったわ。」阿小が言った。「なら彼女はうちのご主人様よりずいぶん気前がいいよ。うちのご主人様は盛大に客を招待したことなんかこれまでにないし、招待するのは女一人だけ。何を食べるのか話してあげる。牛肉スープ、スープができれば肉は揚げて別の料理にするの。あとはとうもろこし。客がもし初めてなら、さらに甘いものを一つ、2回目からはないよ。……彼には李お嬢さんがいるんだけど、李お嬢さんは食べ慣れないから、レストランで料理を注文して届けてもらうの。李お嬢さんはご主人様に対して本当に誠実だよ！ ご主人様はまた新しい人とくっついてしまったのよ。わたしは相手が変わるごとに見劣りしていても、ご主人様は気にならなくなってしまうんだと思うの。今日の人なんか、ゴードという名前すらうまく言えないんだから。秀琴が言った。「中国人なの？」阿小がうなずいて言った。「中国人にも様々なのがいるわ。……あんた部屋に来て李お嬢さんが贈った誕生日プレゼントを見てごらん。銀の食器だよ。ご主人様が中国のものが好きだと知って、銀製品のお店で作ってもらったの。ガラスの箱に入っていて、箱には赤色の寿が貼ってあるわ。」秀琴はそれを見て、ほめたたえて言った。「どう見ても数千元はするわよね？」阿小が言った。「もっとするわよ！」

このとき太陽が少しばかり出てきて、部屋を照らすと、紙たばこの煙のような紫色で、ベッドの上には散らかった吉祥模様のクッション、枕元にはラジオ、画報に雑誌、ベッドの脇にはスリッパ、北京製の赤と青のカーペット、灯籠の形をしたくずかごがある。大小のマホガニーの机が一つ一つ連なっている。壁の隅には京劇のくま取りのお面が掛かっている。机の上には一对の錫製の燭台がある。部屋の中はちょっとした趣に満ちており、いささか白系ロシア人高級娼婦の部屋のような。中国のいくつかの枝葉末節を継ぎ合わせて安住の地を構成している。最も凝っているのは小棚にある紫煙模様のグラスで、種々様々あり、色々な酒を飲むのだ。整然とした一列の酒瓶は、瓶口に赤や青や緑の卵型のコルクがさしてある。さらに浴室には一揃いの薄い灰黄色のくしがあり、くしの歯の太いものから細いものへと、7、8本が一列に並べてある。これを見れば人をもどかしく困惑させてしまう。なぜなら主人の髪は抜け始めており、気をつければ気をつけるほどあの貴重な髪がまつげのように、さっとかすだけで落ちてしまいそうだからだ。

壁には銀の細いフレームで洋酒の広告がはめ込んであり、暗い影の中に赤い髪をした白い

体が横たわっていて、驚くほどに成長した裸の美人である。タイトルは「街で最もすばらしい」。このブランドのウイスキーと同じように一流である。この美女は片手で見えない家具によりかかり、あまり心地よさそうな姿勢ではなく、全身の骨格をぎこちなく支えていて、それはアイスクャンディーのようで、表面には冷たい肌が凝結している。彼女は体を斜めにし、尖ってピンとした丸くて大きな乳房が露わになり、誇張された細い腰、腿の部分は狭い。裸足になっていて、必死でつま先立ちをしてハイヒールを履いているようだ。短く四角い「淡紅色の玉の顔」で、椰子色の大きな目は呆然と絵の外の人を眺め、楽しそうでもなければ放縦でもなく、まるで子どもが新しい服を着て写真を撮るかのようで、傲慢な気持ちさええないのだ。彼女はよくできた乳房、太腿、乱れ髪がどれも整然とまとっており、あたかもファッションモデルが店の服を顧客に見せているかのようだ。

彼女はゴード氏の理想だが、今に至るまでまだ出会ったことがない。出会ったとしても、ゴードは少しだけよい思いをできたらそれでよいのだ。もしあまりに面倒であれば、それさえも必要としない。一つには美人の晩年には、よりいっそう時間と金銭を必要とするからで、しかも彼は見抜いている。どの女も大差はないと。ゴードは良家の女性とつき合うこと、もしくは半分売春をしている人にわずかな余暇のロマンスを与えることをこれまで主張してきたが、彼女らが財産を奪って貧しい者を救うことを望んではない。ゴードは「賭けが長引けば必ず負けるし、恋が長ければ苦しい思いをする」の道理がよく分かっており、賭けごとではいつも様子見をし、勢いに乗じて少し勝ちを手にしたらすぐに出ていってしまうのは、わきまえているからだ。

壁にこのような写真みたいな絵が掛かっている、別に淫らというわけではなく、流線型の車が展示してあるのと同じで、買わずに見るだけでもよい。阿小と秀琴がそれを見ようとしなないのは、ふたりが田舎から上京してきた者で、何かにつけ驚いたり感心したりするのだと思われたくないからである。

阿小が言った。「水があるうちに、わたしには洗わなくちゃならないものがいっぱいあるから、あんたは座って一休みして。——世の中にはこんな一途な女もいるんだね！」阿小は李お嬢さんを気かけながら、腰をかかめて、洗濯をしながら、ふうふうと息を切らしながら言った。「彼を好きになるだろうかね！ あの男は10人の女よりも小ずるくて悪い奴だよ、お隣の女主人がパンの配給券が1枚余って、わたしがパンを1つ取りに行ったら、自分のだと思って、じろじろ見ているんだから。何か盗もうとしてもあの人からは無理。あの人ったら、一週間前に食べ残したわずかなご飯を今になるまで残しているの。あの人が必要ないと言うまで、わたしは何もしないよ。『上海というところはよくないなあ！ 中国人は使用人すら外国人を騙すんだから！』あの人もし上海にいなければ、外国にいる外国人はみな戦争に行くんだから、とっくに戦死しているよ！ ——前回も同じだった。たらいいっぱい

服が浸けてあるの、わたしが洗わないのを心配しているかのようで、シャツの色が落ちてめちゃくちゃだったわよ。あの人はそれでも何も言わないわ——今はますます嫌らしくなって、今日あの女よ——病気にならないわけがないでしょう？ 2ヶ月前には頭や顔中にできもののようなものがあった、今はよくなったほうだけど、どんな薬を塗ったのかしら、シーツがひどく汚れていたわ。」

秀琴は長いこと返事をせず、阿小が振り向いて見てみると、ドアにもたれかかり指を咥えながら考えごとをしていた。阿小はそれで思い出した。嫁ぎ先がまもなく秀琴を嫁に迎えることになっていて、母親が田舎へ連れていく予定なのだが、秀琴は首を縦に振らないのだ。それで尋ねた。「あなたのお母さんはまだ上海にいるのかい？」秀琴は親しげに呼んだ。「姉さん。」そして言った。「わたしはここにいるのが嫌だわ！」秀琴は泣き出しそうで、まるでやさしく赤く潤いのある目が全く唇のようになってしまった。

阿小が言った。「わたしは思うんだけど、やはり行かなくちゃだめよ。そうでないと相手があんたのことを悪く言うわ。年頃の娘が、きっと上海で何か問題を起こしたんだとね。」秀琴が言った。「お母さんもそう言ってたわ！ 行かなくちゃだめだって。行ったってすぐ帰ってくるわ、田舎の生活には慣れないからね！ お母さんはここ数日すごく張り切っていて、向こうであれもこれも買って、さんざん騒いで値段が高いと言うもんだから、わたしは何をぶつぶつ文句言っているのと言ったわ。布団や枕はお母さんが見栄を張るためだし、刺繍模様の入った服は今後上海では着られないわよ。わたしは他のものはどうでもいいの、彼らを買ったアクセサリーの中でわたしは金の指輪がほしいの。これくらいのもの、我々に返してくれなきゃね。ねえ、彼らがメッキのものを持ってきたらね、ほら絶対に地面に叩きつけてやるわ！ ねえ、わたしにできるかしら？」

彼女の高貴なプライドが阿小をいささか不愉快にさせたのは、阿小とその夫が「結婚式」を挙げたわけではなく、ここ数年いつもあの頃あんな形で一緒に住むべきではなかった、賑やかにやればよかったと思っているからだ。阿小が言った。「実のところあんたが我慢すればそれでいいじゃない、あの頃ほどじゃないわよ——あんたは連中にどこへ金を買いに行かせるっていうの？」意地悪を言おうと思ってもできず、浴槽の前に腰をかかめ、暑くてぼうとし、口と鼻の間にはひどく汗が出て、頭の汗も下に落ちてくる。手でぬぐうと、暑いのは分かっているが、それでも奇異な感じがした。阿小がしゃがんでいるので、秀琴は阿小の薄絹のシャツから漂う汗の臭いがきつくなってくるのを感じた。まるで西瓜を切ったときに漂ってくる生臭さのようだった。

秀琴が再びため息をついた。「行かないのもだめなのよね！ あの人達の家は元々床が土だったんだけど、新しい家だけは板を敷いたの……本当にうとうしいわ！ あの人はよく賭けごとをするらしいんだけど——姉さんわたしはどうしたらいいの？」

阿小は服を絞り、ベランダに持って行って干した。百順が学校から帰ってきたが、ベルを鳴らす勇気がなく、裏口で叫んでいる。「お母さん！ お母さん！」木の柵をたたきながら長いこと呼んでいる。建物の外で、正午の太陽の下で、薄青色の大都市はより一層広野のようである。阿小は服を干し終え、厨房へ料理をしにきてから、ようやく聞きつけ、ドアを開けて百順を入れ、怒って言った。「ぎゃあぎゃあ何を騒いでいるんだい？ そんなに待ってられないのかい！」

阿小は秀琴と一緒に食事をする、再び客が2人やってきた。一人は同郷の年輩の女中さんで、しょっちゅうおしゃべりをしにくる。他のときは帰ろうともしないが、いつも相手のお邪魔をしてはいけなとも思っていて、自分で弁当を持参し、親しげに11階までやってくる。もう一人は米担ぎと臨時雇いを兼ねている「姉さん」で、阿小が紹介した階下の家で洗濯をやっている。「姉さん」は百順を見て、尋ねた。「この子があんたの子どもかい？」阿小は百順に怒鳴って言った。「ちゃんとあいさつしなさい！」振り返ると、顔を赤らめて友人に謝るかのように言った。「チンピラみたいでしょう？」

このご時世、阿小のように熱心に人に食事を振る舞う者はめったにいない。阿小は面子を重んじるから、この日はたまたま白米があるのがうれしかった。阿小は料理を作るのに忙しくしていると、年輩の女中さんが秀琴に嫁入り道具の詳細について尋ねた。秀琴は微笑んで、なかなか口を開かない。ピンクの顔はうつむいてまるで花嫁のようだった。阿小は秀琴の代わりに一つ一つ答えると、年輩の女中さんも意見をたくさん言った。

臨時雇いの姉さんが尋ねた。「お宅の上の階に引っ越してきたのは新婚さん？」阿小が言った。「そうよ。150万で家を手に入れたの。男は金持ちで、女の方も金持ち——それこそ羽振りがいいものよ！ 家、家具、いくつもの寝具、それに500キロもの米、500キロもの石炭、このアパートじゃ置き場所がないわよ！ 4人のおつきの使用人、男一人に女一人、料理人が一人、人力車夫が一人よ。」その4人の使用人は、葬式で使う紙の一對の男の子と女の子のようで、それぞれが背筋をピンとさせて立っており、全員揃って、目の白黒がはっきりしている。金持ちがすることは見事なのだ！ 阿小は楽しくなってきた——こうして話していると、秀琴を圧倒してしまい、秀琴の愁いなどどうでもよくなってしまふ。

姉さんが尋ねた。「結婚して何日？」阿小が言った。「3日は経っているわね？」女中さんが尋ねた。「新式のやり方、それとも旧式のやり方？」阿小が言った。「もちろん新式よ。でも嫁入り道具もあったわ。一箱ずつ上に運んでいるのを見たの。」秀琴も尋ねた。「花嫁さんは綺麗だった？」阿小が言った。「花嫁は見てないの。誰も出てこなかったわ。上はいつも静かで、何の物音もしないわ。」姉さんは尋ねた。「わたしは以前家を見に来たときに見かけたんだけど、すごく太っているようで、眼鏡をかけてたわ。」阿小が弁護するような感じで、不機嫌そうに言った。「それは花嫁じゃないかもしれないわよ。」

年輩の女中さんは茶碗を持ったままドアにもたれて、ため息をついた。「やっぱり外国人の家で働くわ。さっぱりしているもの！」阿小が言った。「まあ！ このご時世、お手当は少なくとも、中国人の家だと、食事も住むところもあるのよ。わたしなんか、契約は1ヶ月3000元だけど、食べるにも事欠くありさま！——食事はないらしいんだけど、それも雇い主によるわね。お向かいさんはじゃがいもを炒めるといつもバケツ半分位の量になって、みんな食べてるわよ。」百順が言った。「お母さん、お向かいさん今日は芥菜と肉の炒め物だよ。」阿小は箸で百順を叩いて、怒鳴った。「お向かいさんがいい物を食べているんなら、お向かいさんとこに行って食べたらいんじゃないか！ なんで行かないのさ？」百順はそっと目配せをし、泣かないでいたが、みんなになだめられた。「うちの2人のガキなんて、この子より年上だけど、こんなに利口じゃないよ！」近づいて行って親しげに呼んだ。「チンピラちゃん！」わざときつく「どうして米はかきこまないのかい？ おかずはたくさん食べるくせに、米はまだこれっぽっちじゃないの！」阿小がまた愛おしくなって、言った。「好きなようにさせといて！ 食べれるだけ食べないと、後でまたお菓子がほしいと騒ぐから。」そして百順に促した。「食べるなら今のうちだよ、後になってどんなに騒いでももうないからね。」

年輩の女中さんは百順に尋ねた。「ご飯を食べたら学校に行かないのかい？」阿小は言った。「今日は土曜日よ。」振り向いて百順をつかんだ。「土曜日は、帰ってきたらどこにいるのか分からなくなっちゃうからね？ ちゃんとここに座って2時間勉強してから遊びに行くんだよ。」百順はビスケットの容器の上に座って、本は腰掛けに並べ、体を揺らしながら歌っている。「僕は丈夫になるんだ、丈夫に！ 父さん母さんは僕を宝物と呼ぶ、宝物と！」少し読んでから尋ねた。「お母さん、2時間勉強したら遊びに行ってもいいんだね、お母さん、今何時？」

阿小は全く相手にせず、秀琴が笑って言った。「百順はいい声してるわね、姉さん彼に講談を習わせて、大金を稼いだら？」阿小はしばらくぼんやりして、顔を赤らめ、笑ってあっさりと言った。「うちの子はだめだよ？ 小学校を卒業するにはまだ早いわ。勉強はできないけど、わたしはあの子に上の学校に入ってもらいたいのに！」秀琴が言った。「何年生になったの？」阿小が言った。「まだ3年生。留年しちまって！ 恥ずかしいよ！」阿小は百順をちらりと見ると、胸に寡婦の悲哀がこみ上げてきた。阿小には夫がいるが、いないのも同然で、全て自分でまかなっている。百順は阿小ににらまれて、怖くなってきたようで、体を揺らして早口で歌った。「僕は丈夫になるんだ、丈夫に……」

年輩の女中さんが言った。「この天気は本当におかしいよ、閏月でもないのに。いつもは9月になるとだんだん寒くなってくるはずだけどね。」百順はふと思出したかのように、顔を上げて言った。「お母さん、寒くなったらマスクがほしいよ。先生がマスクはいい、風

邪にならないと言っていたもん！」阿小は突然怒りがこみ上げてきて、叱って言った。「よくまあ先生先生だのと言ってられるわね！ 留年したくせにそんな嬉しそうに！ あんたは嬉しいのかい！ 嬉しいのかい！」百順の体を2、3回叩くと、百順は泣き出したので、年輩の女中さんが慌てて仲裁して言った。「それくらいにしておきな、もう叩いたんだから。」

阿小は百順の鼻をふいて、怒鳴って言った。「ほら、泣くんじゃないよ、早く勉強しな！」百順はしゃくりあげながら小声で本を読み上げると、突然元気になって叫んだ。「お母さん、お父さんが帰ってきたよ！」父が帰ってくると母はいつも喜び、百順もおかげをこうむることができる。お客達も知っている。阿小の夫は仕立職人をしており、店に住み込んでいるため、夫婦はめったに会うことができないが、たいそう仲がよい。みんなは二言三言あいざつをすませると、それぞれ帰っていった。阿小は裏出入口まで見送って、言った。「また遊びにきてね！」百順も後について言った。「おばちゃんたちまた遊びにきてね！」

阿小の夫は白い大風呂敷を抱え、薄絹のハイネックの長衣を着ている。阿小が椅子を持ってきて座らせた。太陽が次第に彼の体を照らしてきたが、彼はそれでも足を上げ膝を抱えてじっと座っている。午後の太陽がカンカンに照らしつけ、鋼鉄の鍋、コンロ、白タイルの厨房が光ってまるで熱々のクレープのようだ。厨房は狭く、避難するところもない。阿小が台を組み立て服にアイロンをかけると、より熱気でむんむんした。阿小は夫にお茶を入れてやった。阿小はお茶を盗ることはないが、夫が来たときは例外だ。夫は両手で湯飲みを持ちゆっくりすすって、笑みを浮かべて阿小がアイロンをかけながら聞かせるたくさんの話に耳を傾けている。夫の顔は黄ばんでいて、表情には秘めたる機知がうかがえるが、顔の下半分はなぜか崩れている。出っ歯が、手のように下に伸びていて、口も垂れ下がっている。

阿小は事細かに秀琴の結婚について、金の指輪がなければ嫁に行かないこと、多くのぜいたくなことを話した。男はときおり「おお」と答え、ずる賢そうな黒い目はお茶を見ており、笑みははっきりとして、同情的であり、阿小を悲しくさせた。その同情はまた阿小を怒らせもした。まるで全てが阿小のことであるかのようなのだ——結婚するか否かは男にとっては何の影響もない。同時に阿小はつまらないとも思った。子どもがこんなに大きくなったのに、まだそんなことを考えているなんて。夫は阿小を養ってはいないし、たとえ結婚式をして正式な夫婦になっても阿小を養わなくてもいい。誰が阿小を一年中あくせく働く運命にさせたのか。夫が稼いだ金は彼自身で使う分しかなく、ときどき阿小にせびって互助会に入ろうとさえするのだ。夫が振り向いて子の勉強を見てやろうとし、教科書の字を指して百順に尋ねた。阿小は思い出して、言った。「母が手紙をよこしたの、いくつかよく分からない文があつて。」「呉県政府」の封筒で、「丁阿小女史親展」、左隅に「呈祥」と書いてある。男が手紙を読んで、阿小に説明した。

「阿小へ。手紙。今日手紙を書いたのは。おととい。手紙を受け取ったから。母は郷里で。全て知っています。上海で。元気のことと思います。10月に帰ってくるとのこと。いいですね。3日分の頭痛薬を持ってきてほしいです。くれぐれも忘れないで下さい。郷里は。このごろ。とても平和です。心配しないで下さい。もう一つお願いします。毛糸の上着を持ってきて下さい。くれぐれも忘れないで。もし帰らないなら。早めに郵送して下さい。お願いします。会ってお話するのもいいですね。

九月十四日。母王玉珍より」

田舎から届いた手紙はこれまで阿小の夫のことには触れたことがなく、阿小はよく代わりに百順に返事を書かせたが、手紙は百順のことも気に掛けたことがなかった。手紙を読み終えると、阿小と夫はいささか寂しい気分になった。夫は口も聞かずに座っていたが、ふと自分を擁護するかのように、自分の仕事について話し始めた。「服を作るほかに、俺は最近毛皮の商売もやってるんだ。このご時世、ちょっと頭を使わないとだめなんだ。」夫は風呂敷包みを開けると、毛皮のコートを2着広げて阿小に見せ、毛皮そのものも取り出して、言った。「だからラッコというやつは……」ラッコの生活習慣を話したのは、もともと百順に聞かせるためであった。百順は甘ったれて、いつしか本から離れてしまい、阿小のそばにくっつき、片手を阿小の服に伸ばしてポケットをまさぐり、ぶつぶつ言って、いつまでもまとわりついていて。阿小は非常に注意深く夫の話を聞いており、うっとりとしていた。「うん……うん……ほお……おや……ええ……」夫が結論を言った。「だからラッコというやつは本当に変わってるんだ。」阿小はとっさに適当な返事が出でこず、しばらく考えて、言った。「今、市場じゃイカがずいぶん増えたよ。」夫が言った。「おう。イカというやつもすごく変わってるんだが、おまえは大きなイカを見たことはないだろう、人よりも大きいんだ、全身が脚で、クモみたいなんだ……」阿小は顔に皺をよせて、言った。「本当！ びっくりするわね。」百順に向かって言った。「ぶつぶつうるさいわね……何だって！ 聞こえないよ？ ……おかしくなったのかい！ どこにおまえにやる5元なんてあるんだい！」しかし阿小はすぐ金を出して百順に渡した。

服のアイロンがけをすませると、阿小は小麦粉をこねてクレープを作った。阿小と百順の名義による配給の小麦粉と砂糖である。夫はいささか捨て扶持をもらっているような気になり、手を後ろにやって阿小の周りを行ったり来たりし、むりやり話題を作って話しかけた。父と子がまず熱いうちに食べ、阿小はまだ続けて焼いている。太陽がガラガラと3人の顔を照らし、裏のベランダの壊れた竹のすだれには蝉が一匹飛んできて、どういわけか夏も過ぎたのにまだ生きているのだが、暑さに乗じて鳴いている。「ジー！ ジー！ ジー！」と高らかに楽しそうに。

主人が帰ってきて、厨房の入口を通ると、顔を出して穏やかに呼んだ。「ハロー、女中さ

ん！」阿小の夫はとっくにベランダに隠れ、手を後ろに組んで景色を眺めている。主人は3000元も払って人を雇ったのだから、自分が帰ってきたら女中さんに飼慣らした鳩のように自分の周りを飛んだりついでにばんだりしてもらいたくてたまらない。何度も繰り返しベルを鳴らすものだから、阿小はてんでこ舞いだった。阿小は冷蔵庫から氷を出すと、阿小の夫が後ろに立って、小声で言った。「今晚来るから。」阿小は面倒臭そうに言った。「暑苦しいわよ！」阿小と百順が住んでいる小屋は実際蒸したせいのようであった。——だが阿小はふと夫が後ろに立っていて、ひとりぼっちだとも思った。夫は人をお願いすることに慣れていない——少なくとも阿小に対して夫はこれまで懇願したことがなかった。……阿小は冷蔵庫の灰白色の肋骨に向き合っているが、冷蔵庫の構造は阿小には分からず、人体の内臓のX線写真に等しかった。しかしこの冷蔵庫の心臓はドキドキ動いている。そして中から吹き出るひとしきりの冷たい空気が鼻をつんとさせ、涙が出てきそうだった。阿小は振り向きもせず、ただ一言つけ加えた。「百順はやっぱりお向かいさんのところに泊まらせればいいわ。あそこの女中さんと子どもは住み込みだから。」男が言った。「ああ。」

阿小は氷を届けに部屋に入ってまた戻ってくると、男はもう出て行ってしまった。阿小は下に行ってバケツ2杯分の水を汲んで上がると、主人に風呂に入るよう促した。呼び鈴が鳴ると、あの新しい女が約束通りやってきた。阿小はダンサーだと思った。女が尋ねて言った。「外国人は家にいるかしら？」体をくねらせて部屋に入っていった。後頭部には束ねた巻き髪がピンと立っている。パーマをかけて黄ばんで縮れており、他の部分の黒髪と色が異なり、毛皮を首に巻いているようだ。死んだ獣の毛皮、これが死んだ獣か生きている獣かは分からないが、ピクピクと震えており、一歩歩けば後ろで一回飛び跳ねている。

阿小はカクテルとビスケットを届けに行った。李お嬢さんが再び電話をかけてきた。阿小が主人は不在だと答えると、李お嬢さんは今回ばかりはこらえきれなくなり、なじって言った。「わたしが朝電話したのをあなたの人に伝えたの？」阿小も腹が立った。——これまで誰も彼女の職業道徳に疑問を感じたことはないからだ。阿小は笑ってあっさりと言った。「わたくしはあの方にお伝えしましたよ！ あの方が忘れてしまったのかもしれませんが！ おや、あの方はその後電話なさってないんですか？」李お嬢さんは少し間をおいて言った。「ないわよ。」非常にかすかな声だった。阿小が思った。「誰があんたを呼んだってんだ。使用人に冷たく当たって！」しかし彼女は李お嬢さんが毎回くれる100元のことを考えると、おとなしくゴータに代わって説明した。信じるかどうかは李お嬢さんしだい、どのみち彼女のメンツを保ってやらなくては。「今日ゴータ様は起きるのが遅くて、慌てて出ていかれました。それからオフィスでもおそらくお忙しく、人も多くて、電話をするのもご都合が悪いのでしょうか……」李お嬢さんは「ええ、ええ」と答えていたが、電話ごしで泣いているようだった。阿小が言った。「それでは、ご主人様が戻りましたら一言お伝えしておきますね。」

李お嬢さんは離れて遠くに行ってしまったかのようで、ひっそりと言った。「もう彼に言わなくてもいいわ……」しかしまた口調を変えて言った。「後日ひまなときにまたかけるから。」李お嬢さんはこの女中さんですら手放すのが惜しいようで、雑談をしはじめた。李お嬢さんは前回ゴードのシーツが少し破れていることに気がついたが、ゴードは独身、誰も世話する人がいないので、代わりにひとつ新調したらどうだということだった。阿小はこのとき李お嬢さんがべちゃくちゃとうるさいのが少し嫌になり、またゴードに代わってメンツを施そうとして、言った。「ご主人様は新調するようとおっしゃっていましたよ。このベッドは家を買ったときに手に入れたもので、あまり気に入っていないし、もっと大きいのをずっと買い直したがついていたんです。もしこのベッドでシーツを作ると、サイズがまた合わなくなってしまいますよ。今はわたくしがつなぎ合わせておけば、見ても破れたかなんてわかりませんよ。」阿小にはゴードに対して突然ある種の母性的な保護が生まれ、きっぱりとそしてきつく言った。

話していると、ゴードが探りに来たので、阿小はあわてて李お嬢さんに言った。「エレベーターの音がしたからご主人様が帰ってきたかもしれませんよ！」受話器を手で覆いながら小さい声でゴードに伝えた。ゴードは眉をひそめて出てくると、部屋の中を指し、阿小に部屋に入ってグラスを下げるよう言った。ゴードは受話器を受け取ると、しばらく座らずに、壁を見て寄りかかり、手を腰にあてて、警戒するように尋ねた。「ハロー？ ……そう、ここ2、3日忙しかったんだよ。……やけを起こすな！ そんなことはないよ。」受話器の相手は怒っておらず、すすり泣く声さえも一息すると聞こえなくなった。ゴードはゆったりとして、また低い声で笑って言った。「もうやけになるなよ……大丈夫かい？」耳打ちしていると、万が一部屋の中の方があちらで聞いているのかもしれない。「君のあの株券はもう奴に買ってもらうよう頼んでおいたよ。君は運がいいよ！ このごろいつもの頭痛はあるのか？ ちゃんと寝ているか？ ……」彼は電話に「シー！ シー！」と息を吹きかけると、相手の耳の中がとともかゆくなった。ゴードはかつてよく李お嬢さんの耳元で息を吹きかけてふざけていたのかもしれない。二人とも昔に戻ったかのようで、クックと笑いだした。ゴードがまた言った。「それじゃ、いつ君に会えるのかな？」デートのことになると、元の様子に戻って、声は厳しくなった。けじめはしっかりつけているのだ。「金曜日はどうだろう？ ……こうすればいいんじゃないか、まず俺のところに来てそれから決めよう。」もし先にゴードの家に来たら、きっともう出かけることはなく、家で夕飯をすませるに違いない。ゴードは片手でよじれている電話線を戻しながら、片方で身をかがめて机の備忘録の女中さんが書いたものを見た。書き間違えた電話番号——阿小はいつも9を逆さまに書いてしまう。誰がかけてきたのだろう？ まさか……しかしこの女中さんには本当にこまったものだ！ ゴードは声を荒げて電話に答えた。「……いや、今日俺は出かけなきゃならんのだ。」

今は服を替えに帰ってきただけで、もう行かねばならないんだよ。……」しかしゴードは再び穏やかになった。電話で今後のことを話したら余韻が後を引くのだ。彼が言った。「だから……それじゃ、金曜日までな！」かすかにため息をつき、しかと言い含めている。「自分自身のことに気をつけろよ。バイバイ、ハニー！」最後の一言はそっとキスをしたかのようだ。

阿小はベランダの藤のテーブルにあるグラスを片づけに部屋に入ると、女が鉄の欄干にもたれかかっていた。この若いダンサーにとって、この全てが新鮮でロマンチックなのだろうか？ 夕方の街には白い霧が立ちこめ、霧の中の人力車が薄暗い中を遠くからやってきた。すこぶる遅く、ゆっくりと通り過ぎていった。車のライト、自転車のベル、全てがおとなしくなって、非常に微妙で、上海も紫禁城であるかのようだ。

階下のベランダは一戸分突き出ておりまるで汽船の先頭のようなものである。階下の若旦那が外で涼んでいて、片足は欄干に伸ばし、椅子は後ろに傾き、ゆらゆらと揺れているが、倒れたりもしない。手には大衆紙を握っている、とっくに見えなくなってしまったが。空が暗くなり、地面にはあたり一面柿の実に菱の実。阿小は若旦那のために掃除してやりたくてしようがなかった——上から下まで静まりかえった夜は、深海の底のようだ。真っ暗なベランダはほのかに明るい宝箱を詰め込んだ沈没船である。阿小の心はおだやかで満ち足りていた。

阿小は料理をしに行った。油の入った鍋がパチパチと音を立て、まるでびっくりした鳥のようにせわしく行ったり来たりしている。まず折りたたみ式の古い調理台を厨房に運びこみ、テーブルクロスを敷き、スープと肉を届け、それから甘いものを作る。甘い卵など話しにならない、阿小は情にほだされ、ゴードのために配給の、彼女自身の小麦粉を加えて、クレープを作った。

阿小と百順が食べているのはすいとん入りの野菜スープで、鍋に薄緑色がひっついて、ぐつぐつと煮えている。すいとんの表面がわずかにぶるぶると震えている。百順は先に食べ終わると、裏のベランダへと歩いていき、一人でつぶやいていた。「月は小さく！ 星は少なく！」

阿小は変に思って言った。「何をでたらめ言ってるの？」笑い出して、「何が『月は小さく、星は少なく』よ？ おかしいんじゃないの！」

阿小は食器を片づけに部屋に入ると、主人が言った。「あとから我々は出かけるから。君は我々が出かけたら、ベッドの準備をしてから帰ってくれ。」阿小は返事をする、おかしな気がしてならなかった——この女けっこうやるじゃないか、ゴードはこの女にお金をたくさん使っているようだね！

阿小は出ていくときにまた百順を向かいの女中さんに預けようと思ったが、あまり早すぎるとは嫌がられるかもしれないと心配だった。バケツ 2 杯分の湯を沸かして、百順の顔をふき

足や首を洗った。電話が鳴ったので、取りに行った。「ハロー？」電話の先からは長いこと声がしなかった。阿小は中国人がかけ間違えたのだと思い、さらに西洋の気性の荒いご婦人の口調をまねして、怒った調子できつく「ハローッ？」と言った。電話の相手はおびえた調子で言った。「もしもし？ 女中さんはいますか？」なんと阿小の夫で、阿小のことを長いあいだ待っていたのだ。「10時になったよ」と夫は言った。

阿小は聞き耳を立てると主人の部屋はまだひっそりしていた。百順はビスケットの容器に座って居眠りしていた。雨が降りだし、竹のすだれがさらさらと音を立て、竹竿が自らが葉っぱだった頃を夢で見ているかのようだ。阿小は思った。「これは都合がいい、口実ができたんだから。」阿小は百順を起こし、お向かいまで連れていき、女中さんに説明した。「雨が降っているから、この子を家へ連れて帰るのはよすわ。子どもが滑って転びやしないか心配だし、風邪にかかりやすいから。おばさんのところで一晩寝かせてほしいの！」戻ってくると、主人のところからはまだ何の物音もしない。阿小はかっとなって、ドアをノックしたのが何の返事もないので、少しだけそっと開けてみると、中は真っ暗だった。いつ二人揃って出かけてしまったのだろう。阿小は怒りをこらえて、ベッドの支度をした。阿小自身も片づけて帰宅しようと、鍵、網の袋、傘を手にとった。短い上着はぬらしてしまうのがもったいないので、裏表逆にしてたたんで手に持ち、裏のドアを開けて階段を下りていった。

雨がますます強くなってきた。空が突然こちらに向かってきた。真っ黒の大きな顔だ。この世の全てが驚いて逃げてしまい、暗闇の中をピカッと、雷が激しく鳴った。苦しそうな青、白、紫が、ひとしきり光って、厨房を照らす。ガラス戸は迫られて中にへこんでしまった。

阿小は意を決して大通りを2つ通り過ぎたが、それでも戻らざるをえなかった。一步一步脚を引きずるように階段を上がっていき、鍵穴をさぐり当てると、ドアを開け、網の袋で手を覆って明かりをつけると、頭も体も水浸しだった。阿小は靴下を脱ぐと、白い絹地に刺繍してある赤い花が色落ちしてしまって、靴全体が赤くなってしまっていた。靴をしぼって水を出すと、窓のつまみの部分に掛けて乾かした。裸足で地面に足をつけ、手を心臓の部分に当てると、心が石板のように冷たく感じられた。厨房の中も外も誰もおらず、泣いて声を出しても大丈夫、阿小は自分自身に突如としてやってきた軽薄な自由に驚き、心の中でぼんやりとだめだ、だめだと思った。一人でここにはいけない、はやく百順を連れ戻さなくては。阿小は向かいへ行った。幸いにも裏口はまだ鍵をかけていなかった。厨房にはまだ明かりが灯っていた。阿小はまっすぐ入っていき、トントンとガラスを叩き、のどをからして呼んだ。「姉さん、ちょっと開けて！」向かいの女中さんが言った。「おや？ まだ帰っていないの？」阿小は笑みを浮かべて言った。「歩けないのよ！ 雨が激しくて、今はあの忌々しい道には電灯がなく、大通りは穴だらけ、穴はどれも水でいっぱい——ほんとうにたいへん

だったわ！ 考えてやはりここに泊まることにしたの。わたしのあのチンピラは寝たかしら？ やっぱりわたしのところで寝かせようと思うの。」向かいの女中さんが言った。「あなたのところに布団はあるの？」阿小は言った。「あるわ、あるわ。」

阿小は布団を調理台に敷き、下には新聞をあてがい、明かりを消し、百順とがまんして寝た。厨房のすごく小さな団らんのぬくもりの中にハエが2匹出てきて、頭上でブンブンと飛んでいる。雨はまだザアザアと降り、突然稲妻が光ると、緑色に輝く電光の中にこんどはクモが一匹、瑠璃の皿の上を歩いていた。

上階の新婚夫婦が口げんかを始め、物音がうるさかった。足音なのか、それとも誰かが押されて柵や窓にぶつかったのか。女が鳴き声でくどくどと何か話していた。揚州方言のようで「あなたはわたしをぶつのね？ ……ぶちなさいよ？ ……ぶち殺しなさいよ？ ……」阿小は枕元で耳を傾けて、思った。「150万で部屋を買ってけんかをしに来たのかい！ 結婚してたったの3日だよ、けんかをする道理なんてないじゃないの？ ……女がふしだらだったら話は別だけど……」阿小は秀琴の嫁ぎ先がすでに新居に床板をわざわざ取りつけたことをぼんやりと思い出した。秀琴は嫌でも嫁がざるをえなくなった。

上階は騒いだり静かになったりしていたが、また騒ぎ出した。今回のドタバタは、きっと女がガラス戸を開け、飛び降りようとしていて、男に止められたのに違いない。女ももう文句を言うことはせず、ただ大声で泣き叫んでいるだけだ。泣き声がおさまってくると、外の雨風がうしおのごとく大きくなり、ゴオゴオと音を立てている。それから再び静けさの中に泣き叫ぶ声が出て、それに続いて雨風の音がする。おのおの互いに干渉せず、舞台でのわざとらしくつけ加えた音響効果のようだ。

阿小はセーターを引っ張り出して百順にかけてあげると、以前百順、夫と一緒に映画を観に行ったことを思い出した。映画の中の女が、どういうわけか窓を押し開けて、そこから出ていった。大雨の街中を、その女は何とか前に向かって進むが、どこを走っても、頭上からたらいをひっくり返したような水が彼女めがけて降りかかった。阿小はつらそうに寝返りを打つと、枕元には、雨がまだザアザアと降っていて、たらいをひっくり返したような水が彼女めがけて降りかかった。阿小は雨の中を寝てしまった。

深夜になった頃、ゴードは女を連れ帰ってきて、厨房へ水を取りに来た。電灯をつけると、ちょうど調理台を照らし、百順は夢の中でうんうんうなっていたが、阿小は目が覚めても、眠っているふりをするしかなかった。阿小は下着のシャツを着て、しま模様の短パンをはいているだけで、体を横にしてうつぶせになると、やせ細っていてカエルの手と足が百順の体にのしかかっているかのようだ。頭上の2匹のハエは、ブンブンと電球にぶつかっている。ゴードは阿小をちらりと見た。この女中さん昼間は非常に秀麗で優美であるが、服を脱ぐとだめだ。ゴードは安堵した。なぜならゴードはもともと阿小を相手にするつもりが少し

もないからだ。使用人とつき合うと、彼女らは本分を守らなくなってしまう。これはもっとも愚かなことだ。ましてや今は特殊な状況で、よい女中さんは本当に得がたいが、女はほしければいくらでもいるのだ。

ゴードはガラスの器に入った氷を持って入っていった。女が部屋でハハハと笑っている。彼女が飲んだ酒が中でゆらゆら揺れており、彼女は透明な酒瓶、香水瓶、ちぎって丸めた箱一杯の薄緑色の紙の中に横たわっている貴重な贈り物になったのだ。ドアを閉めると、笑い声が聞こえなくなったが、強烈な酒と香水のにおいはいつまでもなくなる。厨房の明かりが消えると、ハエは再び見さかいなく顔に飛んできた。

雨がやんでだいぶたった。街には食べ物をゆっくりと呼び売りする人がいる。4文字で1句、何を売っているのかは分からないが、長い調子の悲しみの声が聞こえるだけだ。酒に酔った男女のグループが外国の歌を歌いながら、つるつる滑る道を、声をあげて笑いながら歩いていった。重苦しい夜の重圧の下で、彼らの歌は反抗、軽薄、力のないもので、すぐに消えてしまった。しかし物売りの歌は、街中に響き渡り、世界中の悩みが全て彼の肩にかかっているのだ。

翌日、阿小はエレベーター係に上階の花嫁がなぜ夜中に死ぬの生きるのと大騒ぎしていたのか尋ねた。エレベーター係は変に思ってしまった。「おや？ そんなことあったっけ？ 今日あの人たちは嫁さんの家の人を招くらしいんだけど、俺にも手伝いに行くよう頼みに来たんだ。」やはりいつも通りお客を招待したのだ。

阿小は服を干しにベランダへ行くと、階下の若旦那が昨晚涼んでいた椅子がまだ外に置いてあるのが見えた。突然寒くなり、空は灰色で、通りの両脇の青緑色の木は、静かに一本一本、電信柱のようで、あれやこれやと思いをめぐらすこともない。どの木の下も小さく丸まった緑色の葉っぱに囲まれており、ぱっと見たところ逆さ影のようである。

涼んでいたのが数年前のことのようだ。あの棕櫚の椅子は、平らな場所に置かれていないから、ギイギイと風の中を揺れていて、標準的な中国人が座っているかのようだ。あたり一面に落ちた菱の実、落花生の殻、柿の種、皮。一枚の大衆紙が、溝のところまで風に吹かれ、セメントの手すりにピタっとくっついている。阿小は階下をふと見ると、人ごとのように思った。世の中にはこうやって汚すのが上手な人がいるものなんだね！ 阿小の仕事の中にないことが幸いだった。